

日本のマンガは桃谷から始まった（後編）

戦後の赤本マンガから世界のMANGAへ

中野 善典

桃谷駅周辺

酒井七馬に話を戻す。その後、『大阪パック』からの付き合いのある河井恒雄から土地の一部を借り受け自宅兼アトリエとして天王寺区堂ヶ芝町に居を構える。玄関には「弟子入りお断り」の貼り紙。この堂ヶ芝は桃谷駅から徒歩五分のところにあった。



堂ヶ芝町の酒井七馬宅
(昭和38年)

昭和三八年の住宅地図を見てみると「酒井七馬」の名前を見つけることができる。また隣には「河井」とあるので文献通りである。「堂ヶ芝町一二七」は現在のJR環状線桃谷駅前にあるスポーツ専門商社「デサント本社」の西側裏あたりである。

コーヒー好きだった酒井は、描き終わったら桃谷商店街にあった「タマイチ」という喫茶店によく通っていたという。昭和三三年発行の住宅地図に桃谷商店街を

入ったところに「茶房 玉一」が見える。



喫茶店「タマイチ」
(桃谷商店街) 昭和33年

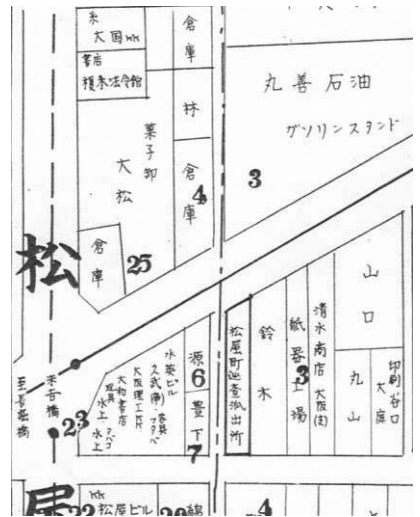
手塚の日記「ぼくのデビュー日記」(前掲書)に次のような記述がある。《昭和二年一月九日 昼から酒井七馬先生を訪ねる。暗くなるまでとうとうとマンガ映画を論じ、帰りにコーヒーとケーキをおごってもらった。》『新宝島』の初版本は昭和二年一月三〇日なのでそれより二十日ほど前のことになる。

『新宝島』が世に出るのは酒井が桃谷駅近くの堂ヶ芝に移ってからだ。手塚と酒井は桃谷で最後の詰めをしていたはずだ。また、手塚の母文字が後に酒井の遺族に出した手紙には、当時まだ学生だった息子に長編漫画の出版に声をかけてくれた酒井への感謝の気持ちと、桃谷の酒井の家を母が何度か訪れ原稿を手渡した様子も記されているという。《手塚治虫 アーチストにな

るな』竹内オサム著 ミネルヴァ書房 二〇〇八年) 『新宝島』は一説には40万部売れたという。しかし、手塚と酒井は奥付をめぐって揉めることになる。奥付に酒井七馬のみの名になっていたのだ。手塚は自身の日記の中で「大いにフンガイし、以後、酒井氏とは全く縁を切ることを決心す」と記した。(『ぼくのデビュー日記』)そして、《昭和二年三月三十一日(月)酒井氏のもとへ「怪ロボット」の原稿を返す。これで彼とは関係をなくすることにしたのだ。》

しかし、漫画家でグラフィックデザイナーの西上ハルオは、《昭和二八年か二九年。・・・東光堂に手塚(治虫)さんが来ているというので、様子を見に行ったら、手塚さんと酒井さんが出てきて、桃谷まで行くというふたりに付いていった記憶がある。酒井さんは足が短い上に下駄を履いているものだから、どンドン遅れてしまった。桃谷に着くと、手塚さんは「不二書房に顔を出す」とさっさと行ってしまつて、・・・》と語っている。『『新宝島』の光と影』(前掲書)もうこの時点では和解していたのだろうか。

余談だが、西上ハルオが手塚と酒井を見た東光堂は赤本マンガの出版社である。東光堂は手塚作品の多くを出版した。『怪盗黄金バット』(昭和二年刊)『ターザンの秘密基地』(昭和三年刊)など15作品。大阪市南区西賑町三番地(現中央区谷町六丁目一八―二二)にあった。松屋町筋交差点の末吉橋東側にある高津原橋のすぐ近くだ。手塚作『ピノキオ』の奥付を見ると「発行者 丸山俊郎」とあり、昭和三八年発行の住宅地図を見るとたしかに「丸山」が見える。



松屋町筋末吉橋交差点 (昭和34年)

丸山俊郎は赤本マンガ出版社で暦専門の出版社でもあった榎本法令館の従業員を経て独立した。榎本法令館も松屋町筋交差点の北側に見える。数多くの赤本出版社がこの界限にあったことがよくわかる。

『手塚治虫漫画全集 有尾人』(前掲書)の「あとがき」に次の記述がある。《東光堂は松屋町の交差点からやや東側・・谷町六丁目よりのところにあり・・東光堂のむかいにはあとで本屋さんができ、その店の娘さんが漫画がうまくて東光堂で表紙などを描いていました。それが、牧美也子さん(現在の松本零士氏夫人)です。》

前述した松屋町筋で貸本取次店をしていたF氏にこのことを尋ねると、「牧美也子さんは大和書店の娘さんですね。後に空堀商店街の南側に引っ越されるのですが、確かに高津原橋のところにおられましたね」と述懐する。住宅地図を見ると確かに「松屋町二三」の一面に「大和書店」を見ることができ。

牧美也子は高津高校を卒業後銀行に勤めた後家業の書籍問屋を手伝う。好きなマンガを描き、近所にあった知り合いの東光堂へ原稿を持ち込んだのが漫画家になる始まりである。

手塚の酒井への感情

手塚と酒井の関係に関して、手塚は『ぼくはマンガ家』の中で伝聞調で次のように述べている。手塚が飛躍するきっかけとなった作品にかかわった人物に対して少し冷たいように感じるのには私だけだろうか。《酒井七馬氏だが、「新宝島」のあと、たいへんな密画の絵物語を数冊だしたとき、ブームに乗ろうともせず引きさがってしまったのである。聞けば、あまりに凝りに凝った画風のために、時流に乗った多作ができず、やがて新人たちに押し流されてしまったのである。・・氏が肺結核で亡くなったという知らせがはいった。なんでも、入院費も治療費もなく、バラツクの自宅にたった独り、寝たきりのままコーラだけを飲み、スタンドの灯で暖をとっているのを人が発見した。生活にはよほど困っていたらしいが、・・》

一九八四年に『手塚治虫漫画全集 新宝島』が講談社から発行される。そのあとがき『新宝島』改訂版刊行のいきさつ」を読むと、手塚の当時の制作過程における酒井七馬に対する思いが見えてくる。《「新宝島」を全集に加えるかどうかについて、講談社の全集担当の方と、長い間検討してきました。正直なところ、全集に「新宝島」を加える予定は、当初、ぼくにはまったくありませんでした》で始まる記述。

《・・その理由として・・酒井七馬さんが原案と構成を担当し、ぼくが作画をしたことになっていますが、原案はともかく、構成の草案はぼくがやり、その際二百五十ページのものになった。それを出版社の事情で酒井さんが六十ページほど割愛されたうえ、さらに原稿のセリフを変え、絵に手を加えたので、完全な手塚治虫の作品とはいえないこと。・・「新宝島」はあらゆる点で、ぼくの作品からかけはなれているので

す。・・当時、この企画を酒井さんが持つてこられたとき、とにかく、好きなようにかきおろしてほしいと草案をおいていかれたので、・・お引き受けすることにしました。それからぼくは、ワラ半紙に二百五十ページの下がきをして見せました。しかし、酒井さんは、出版社との約束が百九十ページがギリギリ限界だということで、六十ページ分をけずられました。・・そして、酒井さんは、変えたストーリーに合わせるためと、文体がむずかしいという理由で、ぼくに相談なくセリフを変えられました。また、これも相談なくぼくの前稿にいろんな字や絵をかき加えられました。・・さて、今度「新宝島」を出版できたのは、はつきりいって、「リメイク」すなわちかきなおし版だからです。《当時手塚はかなり納得がいかなかったことがうかがえる。》

不二書房

当時桃谷駅を西に行けば酒井のアトリエがあった。一方東に歩いていくと冒頭の『まんが道』に出てくる『ロストワールド』の出版社不二書房があった。手塚治虫の初期SF三部作は『ロストワールド』『来るべき世界』『メトロポリス』といわれており、上記3作のうち2作は不二書房から発行されている。ほかに『地底国の怪人』などわかるだけでも13作品もの手塚漫画を不二書房はてがけている。

手塚作の『地底国の怪人』の奥付をみると不二書房の住所は「大阪市生野区勝山通九一七二」(発行者 中村猛夫)となっている。一体どのあたりにあったのか。調べてみることにした。

法務局で土地台帳を調べると「大阪市生野区勝山九丁目七二一七二 昭和二五年十一月十八日 売買 中村猛夫」とある。現在の住所は「大阪市生野区勝山北三

丁目一五番四号」になる。生野警察署と御勝山古墳の間の一面にあり、勝山通の北側になる。敷地面積は20坪ほどなので育英出版同様講談社のような規模ではないことは確かである。

登記簿を見ると売買予約を原因とし、昭和二十七年三月に所有権移転請求権保全仮登記をしている。昭和二十五年一月に土地を買い、約一年半後の二十七年三月にはもう仮登記とはいえ設定登記している。手塚治虫は不二書房から多数の漫画を出版しているが、それらは昭和二十二年から二十六年にかけてである。ということは最初はどこか他の事務所で出版社の商売を始めたのだろうか。

『手塚治虫と路地裏のマンガたち』(前掲書)によると中村猛夫は昭和二〇年代初め大阪の大手出版社として日本出版社と肩を並べる湯川弘文社の番頭をしていたが独立して不二書房を始めた、とある。『京阪神職業別電話名簿』(報國出版 昭和一六年)には「湯川弘文社 南区順慶一―五三」とあり、先述した育英出版の藤田周二がいた家村文翫堂も中村猛夫がいた湯川弘文社も松屋町筋近辺にあった。

一方、松本零士は「大阪の不二書房なんて、戦前から単行本を出していますね」(対談 小松左京 VS 松本零士 『火星探検』と昭和の漫画) 『幻の小松左京 モリ・ミノル 漫画全集 004 解説編』所収 小松左京著 小学館 二〇〇二年)と述べているので戦前なのか戦後なのか、いつ頃不二書房を設立したのか疑問が残る。また、同書では小松左京の興味深いインタビューも掲載されている。

《漫画を出版された不二書房は大阪ですね。ところが手塚さんの昭和二十六年発行の『来るべき世界』はおなじ不二書房ですが、東京の発行となっています。これは

どうしてなのですか。

小松 原稿はすべて大阪で渡しました。当時、不二書房は大阪にありました。赤本を排除しようというマスコミの一大キャンペーンのためなのでしょう。倒産して、東京へ出てきたようです。その後、また倒産したようで、そのため他の出版社に版が売られて、題名が変えられたりしてゾッキ本となって、市場に出回ったようです。》

手塚の『来るべき世界・前編』『同・宇宙大暗黒篇』は昭和二十六年に不二書房から出版されている。不二書房が「東京都千代田区神田小川町三一―四」の東京事務所を構えていた時代の作品だ。この当時不二書房は小松が言うように倒産してから捲土重来上京し再興したのか、それとも 大阪、東京と事務所を同時に二か所置いていた時なのかは定かでない。というのも、『手塚治虫と路地裏のマンガたち』(前掲書)によると、昭和二十四年に日本出版配給株式会社(独占禁止法により、閉鎖機関に指定され、それまで日本出版配給に依存していた《大阪の赤本出版社のうち東光堂や不二書房、育英出版などは東京事務所(と言っても連絡所に毛の生えたようなものだが)を設立して対応にあたった》との記述もあるので、不二書房が一度倒産してから東京へ進出したのかはよくわからないからだ。

不二書房社長 中村猛夫

前述したマンガ家の西上ハルオの談として、昭和二十三年の春、手塚が不二書房に赴いた際、不二書房の中村猛夫社長が迎えた時の回想が載っている。『手塚治虫と路地裏のマンガたち』

《いやあ。センセイの本、二冊とも(二月に出た『地底国の怪人』と『魔法屋敷』)よう売れてまっせ。いう

てはった写真版の件も次から考えさせてもらいまっせ」「えらいごきげんですね。」

「え。分かりますか。いやあ、センセイの目にはかまへんな。実はエエ子が見つかりましてなあ」人懐っこい赤本出版社の社長なのか。新人を発掘したことを手塚に語っている。

手塚の漫画『がちゃぼい一代記』に中村猛夫社長らしき人物が出てくる。



不二書房中村社長？

さらにモリ・ミノルという当時京大生の新人マンガ家を発掘し、不二書房から長編漫画『大地底海』など3作品を立て続けに出している。この中村という人物、新人発掘に長けていたようだ。かなり用意周到であることは間違いない。

さらに、彼の優れたプロデューズぶりも見逃せない。『来るべき世界』前編の巻末の自社広告には、「新人モリ・ミノル先生の快心の傑作揃いです。彗星の如く突如としてあらわれた森先生は京大生で子供達に漫画を通して明るい夢と智性を與たいとの念願から筆をとられたもので将来大いに期待する方です。特に「僕等の地球」は夕刊朝日新聞に推薦され、中井京都市教育委員会の極力推薦されたもので漫画フワンに大きな収穫として待望されています。」との読者の飢餓感を煽るコピーを載せている。モリ・ミノルとは後にSF作家となる小松左京である。

この広告の右横には手塚治虫の次回作『ジャングル大帝』の広告まで載せている。『ジャングル大帝』は結局不二書房からは発行されず、東京の学童社の雑誌『漫画少年』で連載されることになる。

『手塚治虫漫画全集 地底国の怪人』(講談社 一九八二年)の「あとがき」にも、《ところで「地底国の怪人」の原題は「トンネル」というのですが、出版社側の強い要望でタイトルを変えてしまったのです》と記されており、中村社長の読者を惹きつけるタイトルのつけ方にも秀でたものがあつたことがうかがえる。

漫画家を指す少年たちの憧れだった不二書房

この不二書房にまつわる興味深い話を二つ紹介したい。ひとつめは、『天才バカボン』の作者赤塚不二夫の逸話である。

満州で生まれた彼は終戦後父を除く家族と引き揚げ、奈良県生駒郡山矢田口で少年期を過ごす。小学校時代貸本屋から漫画を借りて読んでいた時手塚の作品に出会う。その中でも不二書房がだした『ロストワールド』に魅了され、漫画家になりたいと思うようになった。著書『これでいいのだ』(赤塚不二夫著 日本放送出版協会 一九九三年)のなかで次のように述べている。《「ロストワールド」はもちろんその内容にまず圧倒されたが、本の体裁が他の漫画とはまるで違っていた。ぼくたちがそれまで読んでいた漫画本は全体で60ページぐらいのペラペラだったが、『ロストワールド』は130ページ、それも箱入りの特製本だったのである。』不二書房中村社長のマーケティング能力が光る。

赤塚少年は小学校6年生の時に描きためていた漫画『ダイヤモンド島』をもって「母ちゃん」と一緒に赤本

漫画出版社の三春書房と不二書房へ売り込みに行く。

《上本町で電車を降り、駅前のデパートで食べものを買った。それを途中で食べて出版社へ行った。出版社といても当時はオモチャ屋が出版社をやっているような時代である。貸本屋から借りた漫画の本の奥付から、ぼくは出版社の名前と住所をあらかじめ書き写して持っていた。漫画のぞつき本をだしていた三春書房と不二書房である。》

三春書房では、「きみ、もうちよつと勉強したほうがいいよ」と言われ大泣きした。それから今度は桃谷にある不二書房へ向かう。そこでは「きみ、誰かの弟子になつたほうがいいよ」と不二書房の人に言われ、その後、「きみは誰が好きなんだね?」と尋ねられた赤塚少年は「テヅカジチュウです」と迷わず答えた。《この時ぼくは、「治虫」を「オサム」とは読めなかった。「これはね、「テヅカオサム」って読むんだよ。そう教えられ、その出版社で出している手塚治虫先生の本をもらつて、大和郡山に帰つた。》

ふたつめは、不二書房が未来の漫画少年にどれだけ夢とあこがれを与えたかを表している話だ。松本零士が「店番をしながら読んだ『大地底海』」(松本零士著『幻の小松左京 モリ・ミノル 漫画全集 004 解説編』所収 小松左京著 小学館 二〇〇二年)のなかで、不二書房がどれだけ斬新なマンガ本を発行していたかを語っている。《この漫画『大地底海』は大版の不二書房から出版されましたが、初版の表紙には銀粉が使われ、つまり銀色のインクが使われていた贅沢な漫画本です。中村社長の既成の枠にとられないアイデアが冴えわたる。》

さらに続けて、《ついでにいいますと、不二書房が誰に影響したかという一目瞭然です。藤子不二雄さん

ですね。不二の字がおなじです。不二書房から手塚さんの本がたくさん出版されていたので、それにあやつたのでしよう。また、赤塚不二夫さんもおなじでしょう。このように不二書房から皆影響を受けたわけですよ。当時、漫画を志した少年たちの憧れの出版社があつた時代に、おなじ出版社からこの漫画(小松左京の『大地底海』)が出されたわけですよ。》と述べている。

戦後の漫画界に与えた不二書房の影響力は計り知れないことがここでもうかがえる。

手塚治虫の憤怒

これだけ影響力のあつた不二書房中村社長に対して、手塚治虫は『ぼくはマンガ家』(前掲書)で次のように憤っている。《小粒なFという出版社が、ぼくの初期の大半の作品を出していた。その主人は、小柄な如才ない商売人で、酒は一滴も呑まない代わり、食道楽で甘党だった。「地底国の怪人」「火星博士」「魔法屋敷」「大空魔王」「月世界紳士」「ファウスト」「ロストワールド」「来るべき世界」などを、次々と描いては渡していたが、この主人は、突如として漫画の出版を止め、僕に何の連絡もないまま、ある日とつぜん、それまでの僕の原稿全部を、無断で東京のT書房という出版社に叩き売ってしまった。T書房は、それをご丁寧に出版社名を変えて、版も粗悪なものに変えて再販したものだから、とんでもないぼくのゾッキ本が、市場に出回ってしまった。当時、猛烈に腹が立って、両出版社の前へ行って壁じゅうに鄙猥なことを落書きしてやるうかと思つたぐらいである。》

「F」とは不二書房のことである。因みに「T書房」とは、鶴書房という出版社で、不二書房から発刊された2年後に、『宇宙人対地球人』『地球最後の日』というタ

イトルで刊行された。

手塚治虫は『手塚治虫漫画全集 来るべき世界』（講談社 一九七八年）の「あとがき」で次のように愚痴っている。《この作品にはいろいろな思い出がありますが、いちばん腹が立っていることは、この原稿を無断でゾッキ本屋に売られてしまつて、勝手にタイトルを変えて出されてしまったことです。「来るべき世界」のときは一色刷りだったので、このゾッキ本は色をぬつたのか、目もあてられないような二色になっていたりして。そんな二色刷りの「来るべき世界」を「らんになつたかたは、なるべく本をすててください。なにしろ、まがいもののゾッキ本ですから・・・。》

因みにゾッキ本とは、見切り品として、定価を度外視して安価で取引される本や雑誌のことであるが、ここでは正規な取引以外のルートで販売された本という意味で手塚は使っているのであろう。

「関西赤本マンガ出版史外伝」（別冊太陽 子どもの昭和史 少年マンガの世界Ⅰ【昭和二〇年〜三五年】）米沢嘉博編集 所収 平凡社 一九九六年）の著者中野晴行は、「講談速記本」を引き合いに出し不二書房の中村猛夫の行動を分析している。「講談速記本」とはテレビもラジオもない時代、寄席に行けない人のために、高座の模様を速記者が記録して本にしたもの。地方や貸本屋を販路にしていたこともあり、赤本マンガと重なる。《講談速記本を扱う版元同士の間では、版権の譲り渡しは日常茶飯事として行われていた。のちの手塚治虫は不二書房が著者に無断で版権を譲り渡した、として不二との関係を断ち、大阪を見限ることになるが、版元してみればそれも慣行だったのである。》

手塚が言う「小柄で如才ない商売人」中村猛夫という人物は稀代の大物プロデューサーだったのか、それと

もただの「詐話師」だったのか。漫画界の秋元康、いや、ドン・キングだったのか！現代の出版界で例えるなら、幻冬舎の見城徹社長ばりの戦後直後のヒットメーカーだったのか。それとも戦後の初めの数年間だけ花開いたただの一発屋、ラッキーおやじだったのか。

近代漫画の始発駅

昭和二〇年代、手塚治虫、酒井七馬、赤塚不二夫、小松左京、さらに言えば多くの漫画家を目指す人たちが桃谷駅を利用した。夢を追いかける多くの漫画家志望の若者が原稿を持って不二書房を訪れたことであろう。「弟子入りお断り」と書かれた酒井七馬のアトリエを訪れた者もいたはずだ。ある意味桃谷駅の改札口が漫画界の登竜門だったのかもしれない。彼らはどんな気持ちで桃谷駅で降り、帰りはどんな気持ちで電車に乗ったのだろうか。今日日本の漫画は世界中で読まれている。私は日本のマンガが世界の「MANGA」になった始発駅は桃谷駅だったと思いたい。桃谷駅を中心に酒井のアトリエ、不二書房という近代漫画の出発点が終戦時に存在していたと考えたい。

赤本マンガから貸本マンガへ

赤本ブームが終焉すると今度は昭和三〇年頃から貸本マンガ・「劇画」マンガの時代へ流れていく。その中でも、「桃谷」に関係する人物が登場する。

赤本マンガの値段は、昭和三十年ごろから物価の上昇によって百円を越すようになり、赤本マンガを買えない子どもたちは、貸本屋を利用するようになる。それにともない貸本屋ルート専門のマンガ本が出てくる。代表的なものが昭和三十一年創刊の『影』（日の丸文庫・大阪）だ。そして、そこから「劇画」という言葉が

生まれ、新しいマンガの時代が開かれる。

手塚など一流の漫画家が中央の出版社に作品を出すようになる、赤本を手がけていた出版社のかなりは倒産したり、マンガの出版から手を引いた。もともとメロンコや玩具を手がけていた会社が一山当てようとして参入したため、儲からなくなった時の撤退も素早かつたのである。

そんな中で、貸本向けの単行本を次々と刊行する出版社もあった。そのひとつが日の丸文庫（八興出版）である。松屋町筋近くの「大阪市南区安堂寺橋通り二一六」にあった日の丸文庫は新人作家の辰巳ヨシヒロやさいとう・たかをらを積極的に採用し月刊形式の短編集『影』を出版する。

さいとう・たかをは劇画マンガで頭角を現した代表的な漫画家のひとりだ。後に『ゴルゴ13』を世に出す彼は、専門学校卒業後大阪市生野区の新生里で理髪店「ニュー都」（生野区新生里三一八五）を姉と開店する。

『俺の後ろに立つな さいとう・たかを劇画一代』（さいとう・たかを著 新潮社 二〇一〇年）によると、日中は理容師として働き、夜は母親に叱責されながらも猛然と漫画を描いたという。また、マンガ家仲間の辰巳ヨシヒロらと桃谷にアパートを借りて合宿までしたという。おそらくその時にはもう不二書房は勝山通にはなく東京に移ったか廃業をしていたかもしれない。ただ、理髪店と不二書房があったところは歩いていける距離にある。

やはり桃谷は近代漫画が生まれた。パワースポット、いや漫画の聖地だったといっても過言ではないだろう。

（東大阪新聞読者友の会）